

見市建著『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』(書評)

著者	青山 亨
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	57
号	2
ページ	101-104
発行年	2016-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006822

見市建著

『新興大国インドネシアの
宗教市場と政治』

NTT 出版 2014 年 iv + 205 + 33 ページ

あお やま とおる
青山 亨

本書は、インドネシアの政治動態とイスラームの連関に関心を抱いてきた著者にとって、バリ島での連続爆弾テロ事件の衝撃が覚めやらない 2004 年に刊行された前著 [見市 2004] から 10 年ぶりの単著である。前著では、スハルトの開発主義体制崩壊後に始まった民主化改革期になって、「穏健」とされていたインドネシアのイスラームのなかからテロに走るイスラーム主義が登場した背景を著者は明らかにしようとした。

その後の 10 年間、2 期続いたユドヨノ政権は、テロの抑制、政治的安定と経済成長の維持に成功し、世界最大数のイスラーム信徒を擁する民主主義国家を標榜するに至った。同じイスラーム諸国のなかでも中東の諸国が「アラブの春」のあとに深刻な混乱を迎えていることをみると、インドネシアの安定は際立っている。その一方で、改革期の熱気が失われ、政治家の汚職や腐敗は相変わらず続き、さらには、保守的なイスラームの伸長、マイノリティ宗派や異宗教に対する不寛容な風潮が広がっている。民主化改革という波乱に満ちた政治的離陸をようやく果たしたインドネシアが、安定こそしているがこれ以上の高度上昇もない自動操縦に入ったような停滞感、これがユドヨノ政権の 10 年間、とりわけその第 2 期を総括する印象であった。このような状況のなかで、彗星のごとく登場し、2014 年の大統領選挙で当選したのが、民主化の申し子といえる、旧来の政治的派閥とは無縁な庶民出身のジョコ・ウィドドであった。

著者は、ジョコ・ウィドドの大統領選出を受けて、ユドヨノ政権期のエリート層による寡頭制政治に限界が訪れたとみなし、イスラームが政治の舞台で

のように表現されてきたかを明らかにすることで、これを検証しようとする。この意味で本書は、まさにジョコ・ウィドドの出現に背中を押されて世に出た著作であるといえよう。

分析にあたって著者は、政治と宗教の「市場」という概念を用い、インドネシアの人々が何を基準にして、どのような政治的あるいは宗教的な「商品」を選択しているのかに注目する。

市場とは、参加者が自発的な意思に基づいて交換を行う場であるが、政治市場は、民主化によって政党の結成が自由化され、大統領や地方首長も直接選挙で選ばれるようになり、「買い手」（有権者）の選択肢が拡大した状況を指す。一方、宗教市場は、合理的な「買い手」が、自らの宗教的ないし精神的な投資に対する最大の便益を得ようとする場であり、このような宗教資本（ブルデューの文化資本が想起される）を獲得するために人々は宗教への参加を活性化するという。

民主化改革期に入ったインドネシアでは、言論の世界で自由な競争が進展する一方、グローバル経済が浸透し、消費文化を受け入れた中間層が急速に台頭した。競合する商品から自らの志向に適った商品を選ぶという消費行動をもつ中間層が、同様な行動パターンを政治と宗教の場でも行うようになり、政治市場と宗教市場の拡大をもたらした。

このことからわかるように、政治的・宗教的市場の動向を左右する中間層こそが、本書の主役である。中間層は、2003 年には人口の 39 パーセントだったが、2010 年には人口の半数を超える 57 パーセントに達している。かつてインドネシアの中間層が語られ始めた 1980 年代には、中間層は大都会に特有の現象とみられ、「都市中間層」と呼ばれていた。しかし、人口の半数が中間層となった現在、中間層は都市部に限定されない社会階層としてインドネシア全域に広がっていることになる。

これまで、中間層の拡大は、主として経済発展の文脈で消費市場の拡大あるいは都市住民の消費行動の変化と結びつけて語られてきた。それに対して、政治的および宗教的状況の変化を、中間層の拡大にともなう政治市場および宗教市場の変化として捉えたところに、著者の卓見がある。

拡大する中間層をターゲットにする市場では、政

治も宗教もその主張を「商品」として提示しなければならぬ。ここから、政治および宗教におけるマーケティング、すなわち、政治や宗教に関わる組織や指導者が、市場での需要の分析に基づいて、買い手が求める商品を作り出し、買い手がその商品を買うように仕向ける一連のプロセスが展開することになる。

政治と宗教の「商品化」と並んで、現代インドネシア社会を理解する鍵として著者が提示するのがイスラームにおける「標準化」という概念である。

これは、「グローバルなイスラーム復興潮流のなかで、より正統的なスンナ派伝統への統合が進む状態を指す。そして標準から外れるような信仰の形態が衰退し、あるいは排撃される傾向を示している」。しかし、現代のインドネシアにおいて、ネーション（国民国家）の境界を越えて浸透し、境界を解体しかねない普遍原理であるイスラームに対して、ネーションの境界を維持しようとする求心的な原理であるナショナリズムもまた確固たるもうひとつの「標準」となっている。このため、イスラーム主義の組織であっても、国民国家の枠組みを否定することは困難になっていると著者は指摘する。

本書の「標準化」という概念にはさらなる精緻化が必要との印象が残るが、評者なりに整理するならば、イスラームの「標準化」のプロセス自体が、イスラームの信仰をスンナ派的正統へ収束させる傾向と、国民国家の枠組みを崩すような政治的急進派イスラームを回避しようとする傾向の二面から成り立っているとも理解されよう。

このような、「標準化」に向かう社会のイスラーム化は、国民国家の意識を促進したスハルト政権期において、中間層の形成と並行して進行した。著者たちのチームは、社会のイスラーム化と中間層との相関関係を実証的に明らかにすべく、世論調査を実施している。この成果の詳細は別稿を参照しなければならないが [Miichi and Farouk 2015]、本書では、とりわけ「標準化」が進んだ中間層においてイスラームへの「敬虔さ」が社会的な重要性を増し、非イスラーム的政党の選挙キャンペーンにおいても不可避な要素となったことから、従来のイスラーム系政党と世俗系政党の支持基盤の区別が曖昧になったことが示される。

本書の基本概念をおさえたところで、本書の内容を章ごとに追っていききたい。まず、多様化したイスラームの実態を明らかにするために、1980年代末から急速な発展を遂げたイスラーム出版市場における、イスラーム主義運動に関連する出版活動の発展を概観する（第2章）。著者によればインドネシアには「異例な出版の自由」があり、穏健派から急進派に至る多様な組織がそれぞれの主張を出版やネットで宣伝する状況となっている。この状況は、受動的な読者層を通じてイスラーム主義的主張の拡散には寄与したものの、運動間の路線対立を際立たせ、多くの急進的な運動は社会的マイノリティに留まったというのが著者の評価である。

先鋭的なイスラーム主義の政党としてもっとも成功したのが、「世直し」を旗印に躍進した福祉正義党である（第3章）。同党もまた標準化の潮流のなかで急進的な主張を後退させ、政治市場においては他の組織から際立つ独自性を示せなくなったが、その一方で、社会変革の思想としてのイスラーム主義から自己啓発の運動へと転換することで、宗教出版市場では読者層を拡大している。

宗教出版市場における宗教の「商品化」には、既存のメディアのコンテンツがイスラーム化する方向性と、宗教的イベントがメディアのコンテンツとして商品化される方向性の二面があることが指摘される（第4章）。このため、イスラーム的要素はデファクトの要素となることで、イスラーム自体が特徴的なテーマとして際立たなくなっている。イスラームと政治のマーケティングがつながり、ナショナリスト政党が宗教的要素を取り込んでいったことが、イスラーム系政党の停滞という結果を生んだ。

政治市場と宗教市場におけるマーケティングの重要性が具体的に顕在化したのが2014年の総選挙である（第5章）。いずれの候補も敬虔なイメージを売り込むことで、イスラームか世俗かという基準では候補を区分けできなくなる一方で、ジョコ・ウィドドの支持層拡大に貢献した「メンタル革命」の主張は、福祉正義党がアピールしている自己啓発の活動とも通底している。

以上、本書の結論を端的に述べるならば、近年のインドネシアでは、イスラーム的規範の社会の末端までへの浸透、敬虔で「保守的」なムスリムの増加がみられる一方で、既存の宗教組織や指導者による

政治的動員が伸び悩み、イスラーム系政党の支持が減少するというある種の矛盾がみられるが、それは、拡大する中間層におけるイスラーム化（標準化）が進展したことによって、ほぼすべての政党がイスラームを強調するようになり、イスラーム系政党の特徴が失われたことが原因なのである。

このように、中間層の進展に現代のイスラーム国家インドネシアの特徴をみる本書は、インドネシアを理解するためにきわめて有効な視点を提供しているが、今後のさらなる研究に期待したい部分もある。

第1に、宗教市場という概念の妥当性である。宗教社会学では、宗教市場とは、「宗教の選択の自由」があるなかで、新興の宗派が主流の宗派に挑戦するという意味で使われている。たしかに、イスラーム主義を掲げる福祉正義党の支持基盤が拡大した点について、この定義は当てはまるかもしれない。しかし、インドネシアの宗教市場では、政治市場に比べて選択の自由ははるかに制限的であろう。加えて本書では、宗教書の販売の拡大・多様化をもって宗教市場とも呼んでいるが（正確には「宗教出版市場」と呼ぶべき）、これは宗教市場の意味を拡張しすぎているのではないだろうか。むしろ、宗教市場という分析概念の魅力的な部分を否定するものではないが、より具体的なデータときめ細やかな考察が望まれる。

第2に、中間層というマクロな動向の重要性が明らかにされた反面で、地方やエスニシティといったレベルの差異が捨象されていることである。たとえば、中間層が個人主義的になって流動化したと述べられているが、これは、都市部の中間層の特性がそのまま全体に敷衍されてはいないだろうか（世論調査の結果のより丁寧な分析が望まれる）。言い換えれば、中間層の拡大は、地域やエスニシティの差異を越えてどこまで社会を均質化するのかという問いである。また、総選挙でみられた政党や大統領候補の地方ごとの得票率の分布はローカルな論理を示してはいないのだろうか。見市[2004, 172]で著者は「各地方レベルの歴史や社会構成、地政学に基づくローカルな論理を見直し積み上げ直していくことが必要」と述べているだけに、このような視点をも止揚した研究が続けられることを期待したい。これに関連していえば、本書で比較されているマレーシア

の場合には、エスニシティ間での権力配置を含めた考察がとくに求められるであろう。また、インドネシア以上に中間層が拡大しているマレーシアについて、あるいは、逆に中間層が成長していない地域について、本書の議論がどう適用できるのか、国際比較の観点からのさらなる論考も期待される。

第3に、イスラーム主義の内実が多様化している一方で、イスラーム化やイスラームの「標準化」の進展は、マイノリティの宗教や宗派の集団に対する強い同化圧力を生み出している。この問題についての著者の評価はやや楽観的との印象を受けるが、今後のインドネシア社会の安定を考えるうえでは無視できない要因であろう。ジョコ・ウィドド政権が社会にどこまで寛容性を醸成できるか注目したいところである。

第4に、これは本書の射程を越えることであるが、ジョコ・ウィドド登場以降の政治状況についてである。政治市場での政治的アジェンダの商品化とは、言い換えれば、無党派層ないし浮動票の出現ということである。このことは、著者が指摘するように寡頭制政治による投票行動への影響の衰退をもたらした。しかし、マーケティングによって売込まれた「商品」が実際に買い手のもとに届くのか、あるいは、その「商品」の品質は保証されているのかという点は、また新たな問題である。この意味で、実体としての政治組織についての分析が必要である。さらにまた、政治市場でのマーケティングの優位はポピュリズムのリスクももたらすであろう。ジョコ・ウィドドの出現をもたらした政治状況は、ひとつの時代の終わりとともに新しい時代の開幕であるかもしれない。10年後のインドネシアを著者がどう語るのかに期待したい。

最後に、編集上の若干の問題にも触れておきたい。福祉正義党の前身であるタルピヤに繰り返し言及されているが、これは一箇所にまとめて説明した方がわかりやすいと思われる（77ページと117ページにはまったく同じ文の繰り返しがある）。また、ジョコ・ウィドド大統領の名をジョコウイという愛称で記述するのは、インドネシア研究者ではない読者にとってはいささか誤解を招くところではないだろうか。このほか、24ページでFPIを「伝統主義」とする部分は、インドネシアの土着的な「伝統主義」（21, 55ページほか）と混同する恐れがあり、

むしろ「保守主義」とする方が適切であろう。59ページの「図1-8」と60ページの「(図1-1)」はいずれも「図1-2」とすべきである。131ページの「サハバット・ムスリム社」は「『ムスリムの友』社」、199ページと201ページのフッターの章タイトルは「終章」、参考文献23ページの「四方犬彦」は「四方田犬彦」にそれぞれ訂正すべきである。

本書の要点をまとめるならば、インドネシアにおいて政治的安定と民主化の定着が両立できた背景には、拡大する中間層の動向が大きな要因となっている。民主化によって言論の自由が保障され、(穏健から急進まで)多様なイスラーム主義が主張されるなかで、ムスリム中間層は、サラフィー主義的な性格を帯びつつも急進的な政治改革は望まない形に収束し(著者の言うイスラームの「標準化」)、国民国家というナショナルな枠組み(もうひとつの標準)の保持を志向する。加えて、イスラームの価値を自己啓発の価値へと転換し、グローバルな民主主義的価値も尊重している。この拡大する中間層の意向を政治組織も宗教組織も無視することはできなくなったことで、寡頭制政治の影響力は後退したのである。

むしろ、現在の中間層の志向は、経済成長に裏付けられた右肩上がりの未来への期待の上に成り立っているものであろう。とすれば、今後の経済的(その他の)の要因で状況が変わることで、中間層の志向も変わるであろうし、それを受けて、政治的・宗

教的市場の潮流も変わりえる。とはいえ、その場合でも、中間層の動向が鍵であるという本書の主張の妥当性は動かないであろう。

いずれにしても、本書は、現代のインドネシアに関心をもつすべての人にとって、大いに裨益する一冊である。内容的に見市[2004]を補完するものであり、併せて読むことで現代インドネシアへの理解がもっと深まるであろう。最後に、本書のカバーにある、『タンタンの冒険』のエルジェの作風を彷彿とさせるイラストが「ジョコウィ」登場時の澁刺とした雰囲気をよく伝えており、この絵を選んだ著者のセンスの良さが表れていることを言い添えておきたい。

文献リスト

〈日本語文献〉

見市建 2004.『インドネシア——イスラーム主義のゆくえ——』平凡社.

〈英語文献〉

Miichi, Ken and Omar Farouk. 2015. *Dynamics of Southeast Asian Muslims in the Era of Globalization*. New York: Palgrave Macmillan.

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)